下肢静脈瘤

ラジオ波治療スタート

札幌東・東京西・湘南鎌倉・静岡の各病院

札幌東徳洲会病院、東京西徳洲会病院、湘南鎌倉総合病院（神奈川県）、静岡徳洲会病院が相次いで下肢静脈瘤に対するラジオ波治療を開始した。下肢静脈瘤は、脚の静脈が浮き出たり、ボコボコと瘤のように膨らんだりする疾患。生命にかかわる疾患ではないものの、QOL（生活の質）の低下をもたらす。専用のカテーテルで静脈瘤の原因となっている血管を熱して閉塞し、根治するのがラジオ波治療だ。

身体的負担の少ない血管内治療

下肢静脈瘤をカテーテルで低侵襲に治療するラジオ波治療（写真は湘南鎌倉病院）

下肢静脈瘤は、血液の逆流を防ぐ血管内の弁に病変が生じることによって起こる。逆流すると静脈内の血圧が高まり、大腿やふくらはぎの静脈が瘤状になって浮き出てしまう。

下肢の表面を走る表在静脈と呼ばれる血管に発症する。表在静脈には、大腿の付け根から出ている大伏在静脈と、膝から下の脚の裏側を走る小伏在静脈のふたつがある。

下肢静脈瘤を発症すると、下肢の倦怠感や浮腫、易疲労感（疲れやすくなる）、腓腹筋痙攣（ふくらはぎがつる）、かゆみなどが現れる。悪化すると色素沈着や潰瘍などの皮膚トラブルも引き起こす。

生命に直接かかわる疾患ではないが、QOLの低下をもたらす。立ち仕事や妊娠・出産、遺伝などが発症の要因と考えられている。

ラジオ波治療の専用カテーテルを手にする磯貝医師。左下にあるのが高周波を発生する本体装置

下肢静脈瘤の治療に際しては、事前に「下肢静脈エコー（超音波）検査」を行い、どの静脈にどの程度の血液の逆流があるかを確認し、治療方法などを検討する。

治療法には、弾性ストッキングによる圧迫療法や、静脈瘤に血管を固める硬化剤を注入して血管を閉塞する硬化療法、静脈抜去術（ストリッピング）、高位結紮術、レーザー治療、ラジオ波治療がある。また、瘤が大きい場合は外科的な切除を行う。

ラジオ波治療は、これまで保険適用がなかったが、2014年6月、保険診療としての実施がスタート。

これを受け、湘南鎌倉病院が14年10月から、札幌東病院と東京西病院が14年12月から、静岡病院が15年1月から相次いで同治療を開始した。

ラジオ波治療は熱で静脈を焼灼し、閉塞する治療法。専用のカテーテルを膝付近から静脈に挿入し、対象血管を約120度の熱で焼く。高熱を加えることで静脈壁が収縮し、血管が閉塞する。

表在静脈は、脚の筋肉の中を通る深部静脈と異なり、閉塞しても血液の循環に支障はない。

術前術後の準備を除いた焼灼のみに要する時間は、片足約3～4分と短時間ですむ。

なお他の治療法のうち、静脈抜去術は特殊なワイヤーを表在静脈に通し、静脈瘤の原因となっている静脈を引き抜く治療法をいう。高位結紮術は、血液が逆流している静脈を高い位置で縛り、逆流を防ぐ治療法。

レーザー治療はラジオ波治療と同様に血管内治療のひとつで、レーザーファイバーという細い線を静脈内に通し、約1000度の高熱で血管を焼いて閉塞する。

レーザー治療はファイバーの先端の〝点〟で焼いていくのに対して、ラジオ波治療に用いる専用のカテーテルは先端に長さ7㎝の発熱部があり、この〝幅〟ごとに血管を焼いていくという違いなどがある。

静脈抜去術、レーザー治療、ラジオ波治療など、いずれも基本的に日帰り手術が可能だ。

「足の静脈瘤でお悩みの方はご相談ください」と池谷部長

適応があれば第1選択

14年10月中旬からラジオ波治療を開始した湘南鎌倉病院。同院ではそれまで下肢静脈瘤に対する血管内治療として、レーザー治療に取り組んできたが、使用している医療機器が保険適用となっていないため、自費診療での提供となっていた。

同院は静脈抜去術や高位結紮術、レーザー治療などを合わせて年間250件ほどの下肢静脈瘤の手術を手がけ、このうち8～9割は静脈抜去術が占めていたという。

同院でラジオ波治療を担当する外科の磯貝尚子医師は「レーザー治療は自費のため、手術を希望する患者さんの多くは静脈抜去術を選んでいました。しかし、保険適用のあるラジオ波の治療装置を導入したことから、患者さんには医療費負担を抑えながら低侵襲な血管内治療を提供できるようになりました」とアピールしている。

開始後約1カ月で、30人の患者さんがこの治療を受けた。

同院では大伏在静脈の下肢静脈瘤患者さんであれば、「血管径が太すぎる」、「静脈が皮膚から近すぎる」、「血管の蛇行が激しい」などの理由により、焼灼や閉塞が難しい場合を除き、ラジオ波治療の適応と判断。治療法の第1選択と位置付けている。ラジオ波治療の適応ではない場合は静脈抜去術を行う。一方、小伏在静脈に関しては高位結紮術を実施している。

「生命にかかわる疾患ではないため、こちらからラジオ波治療などの手術を勧めることはありません。手術の適応の有無をこちらで判断し、受けるかどうかの判断は患者さんにお任せしています」（磯貝医師）

下肢静脈瘤の治療で重要なのは、静脈瘤の原因となっている血管をしっかりと焼灼し、閉塞することだ。

導入したラジオ波治療の装置は、機器本体の正面にあるディスプレイに出力とカテーテル先端の温度を表示。この数値を確認しながら治療を行うことで、焼灼不足を防ぎ、治療精度を一定に保つことができる。

患者さんからは「足の症状が楽になった」、「術後の痛みもなく順調」といった感想が寄せられているという。

東京西病院外科の池谷佑樹部長は「ラジオ波治療は静脈抜去術に比べ、皮膚切開を必要とせず体に優しい治療です。皮膚切開をしないため傷も残りません。足の静脈瘤でお悩みの方はご相談ください」と呼びかけている。